

おやま道をたどる ③ 富士吉田浅間神社



浅間神社の境内には、数多くの石灯籠が奉納されています。そのほとんどに「卍」の紋章が刻まれているのにお気づきでしょうか。



これは、吉田浅間神社の復興に尽力された富士講六代目村上光清師に因むものです。光清師はほぼ単独で浅間神社

の社殿を復興され、富士講村上派の隆盛は飛ぶ鳥を落とす勢いでした。その様子を悲観して食行身祿師が烏帽子岩での入定を決意したという飛語が伝わった位です。(実際には身祿師の御入定が先でした。)



参道の右側には「角行の立行石」があります。慶長十五年の冬に富士講開祖角行師が、この石の上で百日間の爪先立ちの修行をされたとのことです。全身から血が噴き出し、里人の懇願で修行を終えたとの話が伝わっています。正面の大鳥居には「三国第一山」の扁額が見えます。揮

毫は曼殊院宮良恕法親王の御手になります。この鳥居は浅間神社ではなく、富士山の鳥居と言われています。



御拝殿左の手洗い処は富士内八海の第一番である「泉端」から湧き出る水とされています。残念ながら、泉端は蓋をされ、見ることはできません。



見逃しがちですが、拝殿両端にある提灯にも注目ください。「蒼龍隊」とは、幕末に組織された御師団の勤王隊です。



金剛杖に焼き印を押された方も多くと存じますが、この浅間神社と頂上奥宮だけが、朱印となっています。



境内には多くの祈念碑、参拝碑がありますが、丸藤講高田講社の石像は山開きにお色直しをすることで有名です。



次回は、いよいよ旧登山道に入っていきます。

敬神の道標 ③

富士講の研究書 2

富士講研究会の人々

岩科小一郎氏が、主に研究の舞台とされたのは、自らが主宰された「山村民俗の会」の機関誌『あしな』誌上でした。この雑誌に岩科氏は数多くの富士講に関する研究を寄せられました。中でも昭和五十年十二月に刊行された「東京の富士塚」は富士信仰における古典的な名著として知られています。

「山村民俗の会」の中には、富士講に関心を持つ方が集まる「富士講研究会」という組織が結成されました。名簿も会則もない集団でしたので、メンバーは確定し難いのですが、平成六年の岩科氏米寿のお祝いには、梅沢ふみ子、大谷忠雄、岡倉捷郎、岡田博、小川博、沖本博、園尾哲郎、中嶋信彰、平野榮次、宮崎茂夫、宮田登の各氏が参加されています。

富士講研究会の研究成果を纏めたといってもいい業績が、『富士講と富士塚』です。東京は、岩科氏と平野氏、埼玉は岡田氏、神奈川は